

とある怠惰な下位互換

チョコ明太子味

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

学園都市に住む中学一年生の七節透。

怠惰で、どこまでいつても超えることができないと人に定められた彼女はこの事件で何を思い、どうなるのか。

目次

後編 前編

--	--

43 1

前編

手に持ったバットを振りぬく。

少し前にできた豆がわずかに痛んだけれど、そんなことは知ったことかとはばかりに振りぬいたバットを再び持ち上げた。

手にできた豆はいずれ固くなって、自分の力になる。

この一回が、自分にとっての成長につながると信じて。

成長。俺にとってはなんだか嫌な言葉だけれど、野球をしている今ならばそんなことはない……かもしれない。

何度も何度も振り続けて、ようやく腕にわずかな違和感を感じた。

どうやら限界が来たらしい。どっかりと近くのベンチに座り込み、スポーツドリンクを飲みながら未だにバットを振り続けている小学生たちを見る。

「はあ……………」

自分は中学一年生。バットを振っているのは小学校の高学年の連中だ。

もうこうなると努力云々の問題ではなく、才能とか、そういった類のものなのかもしれない。

「せいが出るね」

「え？」

自分の上の方から聞こえてきた声に、おもわず後頭部を背もたれにくつつけるようにして声の方向を見る。

そこにいたのは自分より年上に見える少年だった。

その背の高さと顔立ちから一瞬高校生だとおもったけれど、よくよく服装を見てみるとそれは俺が通っている中学校の制服だった。

ちらり、と少し高そうな腕時計をつけたその男を俺は知らない。

つーか、うん。すれ違ったことすらないんじゃないかってレベルで記憶がないです。

「えと、どつかで会ったことありましたっけ？」

「多分一方的にだと思うよ。うちの学校で君は良くも悪くも目立つからね。一年生の七節（ななふし）透（とおる）さんだよな。ごめん。あまりにも必死に練習するものだったからつい声をかけてしまったんだ」

「それは……なんつーか、変わってますね」

そう言われた先輩は少し目を丸くした後、苦笑いしながら君には言われたくないかもとほにかんだ。

うお、なんつーか。殴りたいほどにイケメンだなこの人。

「僕の名前は但馬だよ。但馬（たんま）良光（よしみつ）。中学三年生で君と同じ御手洗中学です」

「ども、改めて七節透です」

そのまま、少し無言の時間が続く。

話しかけてきたんだったらアンタから話題を提供してくれ、と半ば投げやりに考える。

正直、なんでこんなイケメンが不良まがいの俺に話しかけてきたのか分からない。

接点なんてないだろうにさ。

「野球。頑張ってるんだね」

「チームには入ってませんけどね。こここの監督とは仲が良くて、小さい子に教えるのもかねてここを使わせてもらってるんです」

「……君の能力は野球に有利になるものじゃなかったと思うけれど、もしかしたら……」
「それ、俺じゃなかったら顔殴られても文句言えない言葉っすよ」

俺がそう言うのと、先輩は少しもりながらこつちに頭を下げてきた。

まあ、こつちははたいして気にしてないんだけどなあ。

「まあそう言う事っすよ。風を操って剛速球とか、正直やってらんねーわって感じで。しかも見ての通り野球に向いた体に生まれてねーですし」

「じゃあ、なんで君はまだそれをやってるんだい？」

「あー。あはは、分かった。先輩、最初からそれを聞いたかったんだ」

「気に障った？」

「全然。……そうっすねえ……」

情性つてのともまた違う気がする。

その言葉で片づけるには自分は必死にこれに打ち込んでると思うし。

未練でもないんだったら……そだなあ。

「人間、好きなことの一つくらいとっておきたいでしょ？」

「それだけ？」

「だけ、ってひどいなあ。人間、自分のやりたいことは今日にでもやるべきですよ。

じゃないと明日にでも死んじゃうかもしれないし」

事実、この町ではそれが有り得てしまうのだから困る。

学園都市。超能力の開発をするために、脳みそをこねこねする研究ばかりをしている

んだ。

もしかしたら。明日。実験に失敗して。もしくは超能力者に殺されて。

そうでなくても人間なんてあっけなく死ぬのに。

「なんというか。うん。君の意見は刹那的すぎて参考にならないな」

「ひどく」

「でも、まあ。そういう考え方をする人間もいるんだなって思った。あるいはだからこそ君みたいなやつが……」

そこまで口に出してから、口の端から漏れていた自分の言葉に気づいたらしい。

ごめん。なんでもない。と言って、彼は走って俺の視界から消えていった。

変わった人だなあ、と思った。

思ってから人の事をあまり言えないかと気づいて、誰もいないというのにごまかすような笑いが漏れた。

「よっしゃー！飯だアー！」

手に持った漫画雑誌を放り込むと、カバンの中にあつた弁当箱をひつつかんで広げ始める。

ウインナー、ハンバーグ、唐揚げ、そこに申し訳程度にブロッコリー。ほぼほぼ茶色の自分の弁当箱の中身を見て、ウキウキとした顔を抑えきれずにいただきますっ！と手を合わせて弁当をかきこむ。

「あーあー、透ちゃん。それでも女の子なの？」

「心には男性器が生えてるつもりだから大丈夫」

「この子は何を言ってるんだろ」

かわいらしい弁当箱を引つ提げながら、中学一年生の平均体系をものの見事に突き進む金髪の女の子が目の前に座った。

彼女の名前は七夕都（たなばたみやこ）。中学に入ってからからの親友で、どつかの国とのクオーターらしい。

と、ここでネタ晴らしをしなければならぬ。

中学一年生。まだまだ蕾、青一色の七節透は、なんと転生者と言う奴である。たぶん。トラック、刺殺、神様。およそテンプレ転生と言うそれらを経験することなく、俺と言う一個人はこの世界に生まれ落ちていた。

生前の記憶はほとんど摩耗していたけれど、それでも自分が男だったという事はわかったし、魔術とか、とんでも化学がこの世界にあるのはおかしいというのも分かっていた。

だけどチートはなし。原作知識だって、旧作をおぼろげに覚えているだけで、超電磁砲なんて数度立ち読みしただけという杜撰さ。

笑いたきや笑え。そして小学生の段階で能力開発の選査から零れ落ちて、いまじや制服無視のダルダルジャージ。授業中は漫画雑誌を読んでいるというこの不良っぷりさ！

奇麗だった黒く長い髪もぐしゃぐしゃだし、女としての魅力はほとんど打ち捨ててるので正直今のこの体がどのくらい可愛いかわからない。

だって、見た目よりもその恰好と雰囲気地雷女だと分かっちゃうからね！

つらい。まあ嘘だけど。

本当なら笑えたもんじゃないんだろうけどね。

ちくしょう。この世界にたくさんいる神様。なんとかしてくれ。

「そう言えば。ねえねえ知ってる？^{レベル}幻想「御手」^{アツバー}」そうそう。って、透ちゃん。念能力者の

カリキュラム取ってたっけ？」

「取ってないよ。取ってないけれど、俺ぐらいになると七夕さんの考えてることくらい

余裕でわかるのさ」

「すーいすーいー」

なーんて、最初から知ってただけなんだけど。

ちくせう。七夕さんのきらきらした目が痛い。

俺の社会の荒波にもまれた後みたいなの、ひん曲がった目とは大違いだわ！

それにしても。やっぱり中学一年生の段階で原作の時期に来ちゃったかー。

せめて高校生くらいだったらなあ。原作に関わる気も起きただろうになあ。

「むー……」

「ん？透ちゃんどうしたの？幻想御手について気になる？」

おなか一杯になって、思わず声が漏れただけなのだが、七夕さんはそれを勘違いしてしまったらしい。

「いやいや、違う。そのお……昨日カッコいい顔の上級生に声をかけられてさ」

「ほんとに？名前は？」

「但馬良光」

その名前を言ったら、七夕さんはうでを組んで考え込んでしまった。

ちなみに。今の私の好みはちゃんと男の人のつもりだ。

だって女の子には濡れないし。……まあ男の子にも濡れないけど。

「透ちゃんに春が来たのはいいんだけど、なんでわざわざそんな高嶺の花なのかな」

「そんなに有名なの？」

「有名っていうか、根強いファンが多いというか……。但馬先輩はLEVEL2の発火能力者で成績優秀な、イケメンだもの。スポーツは苦手みたいだけど……これで人気が出ないほうがおかしいよね」

「七夕さんもファンなのですかい？」

「え？ううん。私にはもう好きな人がいるしねー」

「ほう？詳しく」

悪い虫だったらもしかしたら制裁しないといけないしね。

フフフ、と悪い顔をしながらそう言う、無難に大丈夫だよ、と流された。心配だ。俺のこの拳がうなってしまう。ブンブンいってしまう。

もう少し問い詰めたほうが……。

「透」。研究所の人から連絡だ。今日は公欠扱いにしてあげるから早く行きなさい」

「ええー、なんだよう……。ごめん七夕さん。用事できちゃった」

「気にしないから大丈夫！行つてらっしゃい！」

「言ってくるぜ」

できる限りきりつとした声で言うと、なんだか七夕さんがもじもじと体を動かした。

う、そんな寒気が出るくらい似合つてなかったかな。

ちよつとナイーブになつてしまう。

「で。呼ばれてきたのはいいんだけどさ。呼び出した本人が遅刻つてどうなのよさ」

『こちらにも忙しいんですよ。あなたの役に立ちそうな実験を日々模索中なんですか』

『ら』

「おう。そんなこと言いながら妙な機械に繋ごうとするのやめろよ」

『だからあれは貴方の苦手分野を補足するための……』

「はッ！ そう言い張るんなら、せめて入れるところにモニタ類でもつけとくんだな。電池代わりにはか考えてなかったくせに」

『すみません。何を言ってるのかサッパリ』

「あー、もういいよ名村センセ」

前にも言っただろうが、能力開発から零れ落ちているせいで俺の研究対象としての価値は地に落ちている。

よって放置されかけていたのだが、そんな俺に目をつけてくれやがったのが話区長と見た目だけは善人なこの名村センセーだ。

俺に軽々しく手を出せる科学者なんかそういないはずなのに、このセンセーはそんなのお構いなしにみようちくりんな発明の部品に俺を使おうとしてくる。

……まあ、たまーに役立つものもくれるけどな。

だけどなあ、と公園のベンチの横に置いてあるバットを見やる。

まあメリットとデメリットが見合っていないよなあ……。

「わあったわあった。しばらく待つてやるからゆつくりと来いよ。俺はひと眠りでもしてるからさ」

『そう言ってくれると助かりますよ』

では、ゆつくりと残りの仕事を片付けさせてもらいます。とか宣ったこいつに思わず

罵声を浴びせかけてしまったことを誰も咎めないだろう。

つー、つー、と無機質な音を放つ携帯を壊しそうになるのをこらえて、少し頭を冷やそうと自販機に近づく。

別に俺はどこぞのL E V E L 5ではないのだから、蹴りとかはいれずにちゃんとお金を払って自販機にいれる。

……いや、当たり前的事なんだけど。

さて、ぐびぐびとスイカソーダを飲みながらひと段落つく。

七月の学園都市はかなり熱いが、このベンチは木陰にかかるようにして存在しており、かなり居心地がいい。

ひと眠りして待ってるというのは、名村センサーに対する皮肉みたいなものだったが、本当にそれをするのもいいかもしれない。

「おお。これはきもちいい……」

枕代わりにカバンを置いてベンチに横になると、ついついうつらうつらとしてしまう。

これはまじで寝てしまうかも……。

「うにゃああ……眠い」

なんだか意識がふわふわしてきた。じゃあこのまま……。

って、危ねえ！

がさがさ、と木の枝を突き抜けて俺の顔に向かってカバンが落ちてきたのを察知して住んでのところで避ける。

「なんだ突然！」

急いで上を見てみると、やけに大きな鳥がビルの間に向かって飛んでいくのを見かけた。

「あー、もしかしてあの鳥がピンポイントで俺の上に落としたのか？」

まったく。主人公でもあるまいに。

「ちよつとそこの方！」

「ん？おわ?!」

声をかけられたと思ったら、いつのまにか俺とそう背丈が変わらない女の子がいきなり目の前に現れた。

……俺はこの子の事をよく知っている。

「どうしたんですの？目を丸くして。空間転移なんて別に珍しくもないでしょうに」

「ん？いや、なんでもないっすよ白井さん」

「あら？以前どこかでお会いしたことが？」

「いや？でも常盤台の超能力者だったらそれなりに有名ですし」

風紀委員だしね、とチラリと腕章を見て思う。

白井黒子。簡単に彼女を紹介するとクレイジーなレズである。サイコではない。おそらく純情派だ。

「んで、これをお探しで？何があつたら鳥に荷物を奪われるのか……」

「まあ私の物じゃないですが。それにしても今はほとんどの中学は授業中では？」

「白黒さんとおんなじでちよつと特殊な場合なんすよ。具体的に言うと、待ち人を守ります」

俺が頭をいじるようなそぶりを見せると、どんな人が来るのか大体わかったようで白黒さんはほんの少しだけ鋭くした目を緩めた。

「なるほど……つて、ちよつと待っててくださいませ、いまなんと？」

「なにが？」

「いや、ですから。私のことをなんと？」

「白黒さんつて」

あ、固まった固まった。これはなんだか時間がかかりそうだぞ、とペットボトルの身を飲む。

そして彼女はおれがペットボトルを全部飲み終えてごみ箱に捨てるまで固まっていた。

大体二分くらい？

「取り消してください……」

「え？なんて？」

「その呼び名はやめてくださいと申したんです！」

最初は消え入りそうな声。そのあとは強い意志をもって彼女から言葉が返ってきた。

「別にいいじゃん。モノクロさん」

「また呼び名が変わってるじゃありませんの!？」

そのあとしばらくわーきゃー騒いだ後、白井さんはゼーゼー肩を揺らしながら、自分の欲求が一生かなえられないことをさとったらしい。

一つ大きなため息を放って諦めるような視線をよこした。

うん。俯瞰的に言ってみただけど、俺が一步譲るだけでいいんだからね？

「なんつーか。お嬢様だなあ。嫌味な意味でなく」

「どういう意味ですか？」

「んー、うらやましいなって思っただけ。ま、俺には関係ないけどさ」

そのまま目をその名の通り白黒させた（あまりうまくはない）彼女を見ています。

この時間は楽しかったんだな。と思わされる。

原作キャラとの絡みが楽しかったのか。

もしかしたら手の届いたつながりかもしれないからなのか。

「おっ！」

そんなことを考えていると、ジジジ、と彼女の持つトランシーバーから音が漏れてきた。

白井さんは俺に断りを入れると、トランシーバーに出た。

なんだか、嫌な雰囲気だ。何か事件でも起こったのかもかもしれない。

「申し訳ございません。私、行かなければいけないところがありましたの」

「おう、行つてらっしゃい。無茶すんなよなモノクロームさん」

「白井黒子ですの……」

どこか疲れた様子で、彼女は俺の目の前から消えた。文字通りにね。

「さ、て。俺も迎えが来たみたいだな」

遠くに見える白塗りの軽自動車を見て、思わずため息が出る。

さ……て、面倒な時間の始まりだ。



「いやあ、すいません。ご迷惑をかけてしまって。……あ、チョコ食べます？」

「……もらおう」

車内にて。横から差し出されたチョコバーをおとなしくもらおう。

チラリと横を見ると、憎たらしい程ニコニコとした顔をした優男。名村先生は新しく取り出した飴玉をころころとなめながら車を運転している。

自分と先生以外の空間はほとんどが甘いお菓子で満たされている。

彼の血糖値が気になるが、それで死んでくれればそれでいいので特に何も言うつもりはない。

「そういえば、最近変なものが流行ってるらしいですねえ」

「幻想御手だろ？」

「毎回、君の耳の速さを異常に思います。一体どこからそんな情報を得てくるのか」

「別に？少し情報通な友達がいるだけだよ」

嘘である。確かに彼女からその話は切り出されたが、元からその知識は識っていた。

もしかしたら、さつき白黒さんが向かった事件も幻想御手に関する事件なのかもしれない。

「どうです？幻想御手を使った実験でも……」

「やだよ……そも、アンタは人の作った物で何かをするのは嫌いなくせに」

「まあ。そういう性分ですからね。では今日は……」

つまらない話から、どうでもいい話にうつりかけた時。目の前のビルから火の手が上がった。

いや。いや。火の手が上がったというよりは、火の柱がそこに立ったというべきなのか。

ビルの高さほどもある火柱がそそり立ち、ビルを今にも飲み込もうとしている。

「ちよつと、止まれ！」

「ちよつ……痛い!?!」

シートベルトをとき、先生のまたの間に上から無理やり足を滑らせて、足ごと車のブレーキを踏みぬいた。

車はそれまでの勢いを止めることができず、やや蛇行してその場にとまった。

うわ、あんぶね。もっと勢いを出していたフロントガラスから車道に飛び出したかもしれない。

まあ、多分死なないだろうけど。

「ちよつと……ここで待ってる!少し行ってくる」

何か言おうとした先生を無視して、現場の近くに行く。

どうやら、火の被害にあつたのは廃ビルのようだ。

遠くからは分からなかったが、地面の間から雑多に生えている草花や僅かに走る亀裂。そして、ガラの悪そうな男たちがビルの中から逃げ出していることからそれが分かる。

おそらくスキルアウトの根城を狙った、幻想御手使用者の犯行だろう。

まあ、スキルアウトの様子を見るに、どうやら誰かが死んだりなんかはしていないようだ。

(で、火柱は中からじゃなくてビルの間と間からだったよな……)

燃え盛る路地裏をのぞき込む。

いや、そうしようと思つたその時に路地裏の中からそこそ背の高い人影がフードを被つて走つてきた。

そいつは俺の隣を走り抜けようとして……。

「ちよつとまてえい！」

ああ、犯人だ。まごうことなき犯人。

というかこれで犯人じゃなかったら、自分が二流ミステリー小説の世界にでも行つたのかと疑うわ。

犯人の目の前に、手を広げるように立つ。

目の前のそいつはそんな隙だらけの行動をした俺に対して戸惑うように足を止めた。

ああ。この喧嘩慣れしてそうにない割り切れない感じ。

完全に鉄火場とは無縁の男だ。

フードで顔が隠れているせいでどんな奴かは分からないが、そこそこガタイはいい。

女子ではないだろう。たぶん。

「あんた、これをやった犯人だよなあ。ちよつと私と一緒に風紀委員のところにてm」「おい、てめえらここで何してやがる」……あれえ？」

気分は昼ドラに出てきそうな刑事。そんなかんじで諭すようにひねり出した俺の説得は後ろから来た物騒なお兄さんたちに遮られた。

えーつ……と。ひい、ふう、みい、よお。うん、いっばいいるね♪

「あやしいなあ、ガキイ。こんなところで何してやがる」

「いやあ、私はここににいる犯人っぽい人を」

そう言つて視線を元に戻すと、フードの男は姿を消していた。

「そんなやつ、いるか？」

「いないですね。アハハのハ」

そうはぐらかすと、壁際においやられ、顔の傍に掌底を食らう。

うーん、壁ドンされるんだつたらせめてそのニコチン臭さは取つてほしいところ。

「あのお、こんな所にいると火にまかれると思うんで、話なら違う所でしましょうか？ 具体的に言えば道路を挟んだあそことか」

「ふうん、なんだ案外乗り気つてとこかよ」

自分のアジトが壊されたくせに、大してきれいでもない女捕まえて下半身で行動と

か、さてはお前ら人じゃなくてけつの赤いお猿さんだな畜生共。

「ええ、そうです。お話ならあとでしますからお願ひします」

へへへ、服装のわりによくみれば案外……。

この人数に耐えきらられるかねえ。とか言ってる男たちを別の路地裏に誘う。

↳十分後

「おいてめえらどうしてくれんだよ。犯人逃がしちまっただろうが。アアン!!」

「しゅいましえん……」

縮こまって隅のほうで震えている、ニコチン臭い金髪男を握りしめたお金を片手に脅す。

あたりには死屍累々の様相があてはまるほどにボロボロになった男たち。

そして唯一無傷のままの金髪男。

別に彼が強いとかじゃなくおれが彼以外を痛めつけただけ。

「んで、お前ら。実は犯人の姿みたんだろ?」

「へ? いやそんな」

「とぼけんじゃねえよくそつたれ。どうせ、俺に犯人の事をついでに聞くつもりだったんだろが。つまり犯人がいるってことは知ってたんだろ」

「う……す、すみませんでしたっ……！顔は見てねえっす！でも……」
「でもっ。」

「あいつの袖からちらつとB—SHOCKが見えましたっす。くそたけえやつだからやけに気になって……」

「あー……。ちくしょう。なるほど。サンキュー。その情報をくれた恩だ。見逃してやるからさっさといけ」

「い、いいんすか？」

「あ、行かないほうがいいか。とりあえずここらの奴介抱しとけよ。いらん誤解くらうしなあ……」

あとタバコやめろよくそ坊主、とだけ言つて鼻息あらく裏路地を出る。

表の方にはすでに風紀委員が人員を割いて、事を収集していた。

右を見ても左を見ても、白黒さんの姿はみえない。

という事は彼女はこことは別件の違う所に向かったのか。

だけど。大体は分かった。

犯人の正体はバッチシ。分らないのは動機だけど。

そこのところはさして重要でもないか。

「さて、じゃあ今日はおとなしく研究所にでも行こうかな……」

グググッと背伸びをして、先生が待っている車に向かう。さ、て。犯人には優しくつらい目にあってもらおうかね。

● 「うーん」

手元にある雑誌とにらめっこ。

それはなんてことないファッション雑誌なんだけど、親からの決して多くない仕送りで過ごしてる私、七夕にとってはかなり重要な問題だ。

どれを買うかを念入りに考えなければ娯楽用にとっておいているお金なんか簡単に飛んで行ってしまおうだろう。

もう少し能力の規模が大きければ学費の援助なんかもしてもらえるんだけどなあ。

二週間ほど前にやっとLEVELEIになったが、まだまだ不満足だ。

(まあ、少しずつがんばろう！)

そんな事よりも、今は目の前の敵と戦わねばと雑誌をめくっているとわかには廊下がざわざわとしたのに気づく。

一体どうしたんだろう。黄色い悲鳴までもが耳に飛び込んできたところで私は雑誌から目を離す。

どうやら騒ぎの中心は私たちの教室に向かっているらしい。

がらから、と少しずつ開けられた引き戸式のドアが開く。
なんてことはない。

その顔は見知っているし、その服装も見覚えのある制服だ。
だけど、大きな問題はその二つが普通は結びつかない人物だという事で。

「透ちゃん？」

そう。その扉から入ってきたのは間違いなく透ちゃんだった。

いつもぼさぼさにしていた髪は綺麗にセットしているし、ちゃんと学校指定の制服に着替えているし。それにあの顔に浮かべた人の好きそうな笑顔はどういう事だろう。

見たことがない。というわけではない。

というより私と知り合った頃は彼女はあんな感じだったから、むしろ戻ったと言ったほうがいいのかもしれない。

「あ、七色さん。おはよう」

「あ、おはよう」

につこりと綺麗な笑顔を浮かべる彼女は、カバンを机の上に置いて一時間目の準備をし始める。

そんな彼女に机ごと寄る。

「ど、どうしたの今日は？」

「なにが？」

何がつて、そりやあほとんど全部についてだよ。

と、そんな言葉がのどからせりあがってきたが、それを言っても詮無きこと。ならば一番大事なことに ついて聞くことにした。

「いつもみたいに女の子をかなぐり捨てた感じじゃなくなってるし」

「ああ」

そういうと、彼女ははにかみながら照れるように少し身をよじった。

いつものイメージが強すぎるからなんとなく違和感を感じてしまう。

「ちよつと今日は大事なことがあるから。せつかくだからと思つて」

「へ、へえ。その大事な事つて？」

「うん。私、但馬先輩にデートのお誘いをしようと思つて」

そんな事を、機嫌のよさそうな顔で言う彼女に。

思わず私の口から出たのは悲鳴だった。

もちろん黄色ではなく青色の。

「な、なんで!?!」

「うーん、気になっちゃったからかな？」

「だ、ダメ。そういうなんとなくでのお付き合いはダメなやつだよ!?!」

「別にそんなことないって」

「ダメ。絶対にダメ！」

そのあとしばらくダメダメと繰り返す機械になり果てていた私を止めてくれたのは目の前にいる透ちやんで。

結局私は彼女を止めることができずに、透ちやんは但馬先輩を呼び出すのだった。

●
って、そんなことで納得できないよねツ！

透ちやんが待ち合わせている場所を屋上から常備している双眼鏡で確認する。

本来なら立ち入り禁止の屋上だが、私にとっての一大事なので問題ない。

「こんなこともあるうかと、指向性マイクを取り付けて置いてよかった」

これで、遠くにいる透ちやんが何をしゃべっているのか私にはすべて丸わかりである。

「さあこい但馬先輩。もし透ちやんにナニカしたら」

その時は私の七つの不思議道具が火を噴くけれど。

『あっ』

透ちやんが短い声を上げる。

彼女の視線の先には但馬先輩がいた。

『あれ。待たせちゃったかい?』

『いえ、私が勝手に早く来すぎてしまっただけなので』

にこやかに彼女たちの話は始まった。

最初はどうでもいいような世間話。

でも、その話もだんだんと距離が縮まり詳しい話になっていく。

そして二十分もしないうちに二人の話は本題に入った。

『それで、今日僕をここによんだ要件は何なんだい?』

『あ、そうでした。すいません、先輩との話が楽しくて……。ここに呼び出した要件です

よね。これなんです』

『これ? 新装デパートのペア割引券?』

『はい。一緒に来てほしくて』

『あはは……。そうだよ。期待しちゃったよ』

あの先輩はすこし鈍感のきらいがあるのだろうか。それは口実でより中を深めるためのものだという可能性もあるのに。

でも。透ちゃん楽しそう。

それは久しぶりにみる彼女の明るい笑顔のような気がする。

それに気づいたとき。なんとなく彼女たちの姿を見ているのがつらくなって。私は先輩の返事を聞く前に屋上から逃げるように立ち去ってしまった。

●
当日。

予定していたことは全て終了。先輩と自分は車ばかりが並んでいる地下駐車場を通って外に出ようとしていた。

なにせこのショッピングモールは折り重なるように設計されており、自分たちが帰る東出口に行く最短ルートはここを通ることなのだ。

「すいません。荷物を持ってもらっちゃって」

「いやいや、日用品ばかりでそんなに重くないしね」

ほら、とそう言いながらビニール袋を持ち上げる先輩が、なんだかほほえましくて少し笑みを含む。

「さて、もういいぞ」

がらり、と自分の一部が崩れるような錯覚を覚えつつ、服の襟部分に仕込んだ装置から指示を出す。

すると、あら不思議。

俺たちの周りにある防火シャッターが閉じ込めるように下りた。

「まあ、説明しなくてもわかるだろう？俺があんたを誘った時点でなんとなく予感はしてたと思うし、俺がこうしてあんたを閉じ込めたってことが分かった今。自分のヘマは自覚してるだろうしな」

「ん、いや。誘ってくれた時は正直何も思ってたよ。そうか、ああ見られてたのか」

参ったな、と頭を掻きながらレジ袋を地面に置く先輩。

余裕そう。ではない。めんどくせえ、幻想御手におぼれてくれたほうがやりやすいのに。

「一応調べたぜ。あんたの妹さんとその友達があそこにいた不良グループにカモにされてた事をな」

あそこで、あまり深くグループに関わってないそうにない下っ端の一人を助けたのはそういう事だ。

ただ情報を流してくれそうなやつを見つけただけ。

情？知らん。そんなもの持ってたら俺はこんなことになってないっての。

「ほら、いいだろ。あとは風紀委員に任せれば何とかしてくれる。もう通報はしてるしな」

白黒さんと面識があつて助かった。子供の戯言、なんて言われることはないだろうが多少はスムーズに話は進んだしな。

「それで、はい。なんて言えるわけがない。グループを風紀委員に渡したところでどうなる。この町から追い出してくれるわけでもない。嚴重注意と罰則だけだ。報復があるに決まつてる！」

「おおっと!？」

ノーモーションで先輩の足元から炎が吹き上げ、こちらに迫ってくる。

やや反応が遅れながらも転がるようにして並んだ車の陰に隠れる。

LEVEL3。いやもうちよつとでLEVEL4くらいか。

「つたく、女の子に手を上げるとか最低でしょうよ!」

「僕がやる。僕以外の誰かができたとしても僕がやる!他人の手を汚させるわけにはいかない!」

その言葉には。誰が、なんて言つてないけれど。俺に向かつた言葉だというのは暗に伝わった。

「は、それは……傲慢だろ」

「なに?」

全く、どうやら幻想御手にはやはり毒があるらしい。

どこまでも驕り、つけあがる。

「傲慢でしょ。自分の妹を助けるために、手を汚すのは自分だけでいいだあ？ ナマ言つてんじゃねえよガキ。本当に助けたいと思ってるなら全くの他人の心配より自分たちの事を考えるだろ！」

「ッー！」

「今のアンタはその幻想御手で周りが正しく認識できなくなってる。妹の事をまず一番に考えられねえ時点でアンタはヒーローにはなれねえよ」

自分の手の届く範囲を守れなくてヒーロー気取りなんてちゃんちゃらおかしい。

こういう時にああいうんだろうな。『その幻想をぶち殺す』つてな。

だけど、俺は主人公じゃないしまずヒーローでもない。

「だから、俺はまずアンタを止めるよ先輩。死に物狂いで全力でな」

「やれるものならやってみろ。力尽くで！ 御手洗中学の L E V E L 4！」

最初に、彼女の事を聞いたのはいつだったか。

ああ。たしか今年の始まりだったはず。

新生入生に L E V E L 4 がくるなんて話が学校中を飛び回ったのだ。

なにせ、御手洗中学の平均はLEVEL1。中学に入る前にその段階の能力者ならまず他の有名校に入るだろうから。

だから、彼女に期待を寄せる人も多かったが、その期待は入学式の日いきなり裏切られた。

「えー、どうも。新入生代表の七節透です。私たち新入生は……フワア……この学校で頑張つて勉強したいと思います。終わり」

決められた制服ではなくサイズの合っていないジャージを着て、壇の上に立った彼女はあくび交じりにそう言ったのだ。

それ以来、彼女は陰では『落ちこぼれのLEVEL4』なんて陰では言われるようになっていった。

たぶん彼女は知っていたと思う。

なにせ広まりすぎていたから。小耳にはさんだのも……いや、目の前で言われたこともあつただろう。

さて、話は変わるけれど。

僕は正直彼女に対して憎しみともいえる感情を抱えていた。

なんでLEVEL4なのに努力しないんだ。なめ腐りやがって、とかかな。

いや、自分はこんなに努力してやっとLEVEL2なのに。だったか。

だから、彼女に文句の一つでも言つてやろうと思つて、あの日。僕は彼女の帰りをつけたのだ。

家の前でもどこでもいいから人が少なくなつた時、彼女と話をしようと思つて。

彼女が向かつたのは野球場だった。

そこで初めて見た。

およそ運動にてんで向いていない体つきで一生懸命にバットを振る彼女を。

だから思わず声をかけてしまったのだ。

それは不意に、突然に。

彼女は変な子だった。

地に足がついていない、というかつかみどころがなく。

いや。もしかしたら彼女から見た自分も変な人に見えたのかもしれない。

だから、あの時彼女に僕は毒気を抜かれてしまったし。

だから、僕が彼女の力量をあの時見抜けなかつたのは当然なのだ。

「だあー！」

自分の足元から火柱を彼女に向けて伸ばす。

慣れたとはいえ、今の自分の力量では火を自分から遠いところに伸ばすことはできな

い。

そこまで行くと、原子の操作に難が生じる。

原子の振動で熱を発生させる、僕の力はだからこそ使い勝手が難しく、発動までの時間が長い能力だった。

だけど幻想御手の力で、バカでかい威力はあまり減衰させずに発動までの演算を早く終わらせることができるようになった。

「つぁー！」

ごうごう、と照らされる火の間から車がこちらに向けて落ちてくる。

それを能力を使い焼き切る。

通用する。今なら『落ちこぼれのLEVEL4』程度なら相手どれる！

「君の能力は念能力かい？」

「はッ！わざわざ自分の能力を明かすとても？」

「なるほど、そりやそうだ！」

相手が次々とよこしてくる車両を躲し、焼き切りながら彼女に向かって攻撃を続ける。

やけどをいくつかするかもしれないが、この町には優秀な医者がある。やけどくらいなら直せるだろう。

「あんたさ、俺の事馬鹿にしてんじゃねえ？ 攻撃の甘さやらなんやらでアンタの考えが透けて見えるぜ」

「そんなことはないッ」

「なんだったっけ？ 『落ちこぼれの LEVEL 4』。あまりにもピッタリすぎて訂正の一つもしなかったけどさ。先輩、俺が LEVEL 4 の落ちこぼれだって勘違いしてないかい？」

つまり、違うってことを彼女は言いたいのか。

彼女の言葉を聞いて、少し警戒レベルを上げる。

「ちよつと見せるぜ。本気を！」

その言葉から数秒もしないうちに、炎をかき分け、並んだ車両を割り砕き。僕の体をかすめるようにして、物体が飛んできた。

「な」

今、彼女は何を飛ばした。車の破片を念能力で？

いや、それにしても速さがおかしい。

「どこぞの LEVEL 5 はゲーセンのコインらしいけど。あんまやるもんでもねえし 100 円玉で代用してみた……けど、だめだな。細かい演算がだめだめ。やるもんじゃねえよな真似事なんて」

炎が風圧で二つに割れ、煙が頭上の換気口に吸い込まれ。彼女の姿が露になった。

「落ちこぼれは落ちこぼれでもLEVEL5からの落ちこぼれなんだ、俺」
バチリバチリ、と体の周りに帯電している電気が見える。

ならば。彼女の能力は。彼女の言っていることが本当だったのならば。

『電撃使い』……」

「そう言う事。ま、能力の細かい調整が及ばずLEVEL4の『代用品』止まりだったけど」

ならば、彼女はLEVEL4の底辺ではなく、最もLEVEL5に近いものなのでは……。

「弱気な顔を見せてんじゃねえよ！」

車に電気を通電。そのまま彼女はこちらに向けて投げ飛ばす。

「なっ……」

バカな。車のアースはどこ行った！

「悪いね。ここらの車は全部見せかけでただの鉄の塊なんだ。だから中身はスカスカ。やけに燃え尽きやすかったろ？」

自分の能力の規模を理解してないせいで勘違いをしていた……。いや、今気にすべき

ところはそこじゃない！

全部彼女の迷惑のうち。やることなすこと全部……。

「くそっ」

ならば、全力で。彼女がこちらの事をすべて知っているのだとしても限界まで！

「ずああああッ！」

視界が赤に染まる。炎、のせいじゃない。ちかちかと視界は明滅し、鼻からはドロリと熱いものが流れ出る。

だけど、だけれど、限界はぶち抜いた。

発火点は彼女の周り。

そのすべてが彼女に向かって進む。

それぞれは遅いけれど、火柱の間を進もうとしても熱風で進めない。

これで……ッ。

「悪いけど、ここで死ぬわけにはいかないんですよ先輩。だって、ここで死んだら先輩が人殺しになりますし」

先ほどもまでのどう猛さは鳴りをひそめ、こちらに向けてニコリと笑った彼女の顔で僕は自分の過ちを悟った。

ばかつ！僕は彼女を殺す気で……。

「逃げ……」

いや、逃げられない。そういうつもりではなかったのだ。

「こういう事もあるうかと、いくつかこの駐車場に準備させてたんですって」

そう言つて彼女が掲げたのは太い一本のバット。

と言うよりはバット状の何か。裝飾のない鉄塊。

「バッター打ちますはッ！」

バットを思いきり引き絞る。

帯電していた電気がバットに吸い込まれ、異常な光を放ち放電した電気が地面に穴をいくつか作り出す。

「一発逆転……」

火柱は彼女に向かって突き進む。

だけれど、彼女がするつもりの方がなんとなく分かってしまい、とつさに身を駐車場
の柱の奥に潜ませ体をできるだけ小さくする。

そして。

「ホオオオム、ラアアアアンツツツツツ!!」

それは一瞬の閃光。

すさまじい光と音に、何も見えなく。聞こえなくなつて。

目を覚ました時には僕の上に馬乗りになって、原形をとどめていないバットだったものを持ちながらピースサインをする彼女がいたのだ。

「いやあ、ひどいもんだったねえ」

「ああ、そんなひどかったですか？俺のやけど」

「いやあ？君のやけどはそれほどでもないよ。ひどいのは君の先輩のほう」

そんなことを言うカエル顔の医者に、まあもうすぐひどいやけどの人が担ぎ込まれるしなあ、と一人思う。

「視力も少し低下してたし、鼓膜も破れてた。しかも顔に何発か打撲の跡だぼく あと」

「えっと、はは。治せますか？」

「もちろん、治せるけど。僕の事をあんまり便利な道具みたいに使わないでほしいんだけどねえ」

「えっと、じゃあまたお世話になりに来ますね、えへへ……」

愛想笑いで何とかごまかしながら、逃げるように部屋をでて溜息をつく。

とりあえずは一件落着。

彼の妹たちはしつかりきつかりと難を逃れたし、不良グループは然るべきところに。

すくなくとも、彼らが先輩の妹に危害を加えることはないだろう。「まったく、久しぶりにあんなに本気を出した気がするぜ」

さて、でもまだやることはある。

先輩は幻想御手を使った。ならば、彼もその後遺症に陥るはずだ。

超電磁砲がなんとかしてくれる、としても。

気になるのは、先輩がゲロった話。

彼に幻想御手を渡した大人がいる。その犯人を見つけないといけない。

「上等だ。馬鹿野郎。俺の周りに手を出したら『第一位』でも許さねえからな……」

まずは、どうするか……。

「……い」

手あたり次第は非効率すぎる。だったら。

「おーい」

ぼん、と頭の上に手が置かれる。

言っておくが、俺はこうされるのが嫌いだ。

自分の背が低いってことを否応に自覚させられるからな。

だから、思いきり電気を流そうとしてしまっても仕方ない。

まあ、流れなかったけど。

「……当麻さん。それやめてください」

「ん？ああ、そういえばこうされるの嫌いだったっけ」

悪い悪い、と言いながら俺の顔をしげしげと見た後彼は溜息をついた。

「なんですか。人の顔を見て溜息なんて」

「いや、おんなじびりびり杵の中学生でもこんなに天と地の差があるんだって」

「……それ、どっちが天ですか」

「ん？あー、七節ちゃん」

ふむ、そう言われてそう悪い気はしない。

「で、結構急いでましたけどどうしたんですか」

「いやだそっけない。昔はもつと懐いてきてくれたのになあ」

ヨヨヨ、と鳴きまねをする上条さんをあきれた目で見る。

すると今度は体を震わせ始めたので、はあ、ともう一度溜息をついた。

「ううう、七節ちゃん怖い。どうやったらグレたのが治るのか……」

「それはいいですから、急いでるみたいでしたけど」

「あ、そうだ。ここらへんに教会ってどこにあるか知ってる？」

「ああそれなら……。それって、本当に行かなきゃいけないですか？」

「え？」

「ちよつとした落とし物程度なら別に届けなくてもいいでしょ」

「うーん。でもこういうのは届けないとだめだから」

……ああ、きつとこの人に何を言っても無駄だ。と、何度も思ったことを今思う。

「教会ならあつちです。じゃあ、上条さんさようなら。また、会いましょう」

「おう、また」

もう彼には会えないだろう。

本当に彼を失うことは避けることができないのか。

過去何回も思ったことを、今思う。

無駄だと知ってもぶつかって、自分程度じゃ足りないのだと何度も泣いたことを。

自分の手の届かない範囲を彼は生きている。

それでも彼は困難に立ち向かっていく。

ならば、自分は自分の周りを助けようと思ったのはそう遠くない過去。

「馬鹿らしい。一番大切な人を守れない癖に」

何度も唱えた呪いを口に出す。

歩く、歩く、歩く。

二人は自分の運命に囚われながら、晒されながら。

彼も私も歩きつづける。

たとえ何が起きても。

後編

コーヒーフレッシュを紙製のカップに入れて、やや乱暴にかき混ぜる。

さてと。黒幕とは別の第三者が幻想御手を使ったという事が分かったけれども、残念ながら成果は乏しい。

自分が使えるコネクションを使えるだけ使っても捕まるのはパシリのスキルアウトだけ。

俺自身の捜査での収穫はなし。

ここまでくると、黒幕は俺の事すら完全に把握して何もかもを掌で動かしているような気がするが……。そんなことができるのはこの町で一人だけ。

まあ、彼自身がかかっているという可能性はない……と思う。思いたい。

「ちくしょう。頭にくるぜ」

髪をわしわしとかき混ぜる。

痛むからやりたくはないけれど、それでもやってられない……。:

……ふと、自分らしくないことを考えていることに気づく。

そこまで焦っているつもりはなかったが、どうやら今の俺は少しばかり冷静さを欠い

ているらしい。

へいじょうしん、へいじょうしん。と心の中で念じていると、そこそこ洒落たコーヒーチェーン店にはおおよそ似つかわしくない男が入ってきた。

その男は店内をぐるりと見まわし、俺を見つけるとニコニコと似合わない笑顔でこちらに近づいてきた。

「ちつす。七節さん、お待ちせしました」

「あー」

周りで客がざわざわとこちらをみなながらこそこそと話しているのを肌で感じ取る。

とりあえ足先で向かい側にあつた椅子を押しやる。

「とりあえず、座つてくれるか？」



スキルアウト。レベル0の念能力者、名前を千波（せんば）一二三（ひふみ）。

少し猫背気味で身長は178cm。逆立てた茶髪の髪の毛の気は地毛。

学校にはほとんど行かずに、スキルアウトの集団内で使い走りよりも一つ上ぐらいの立場にいた男。

その他個人的な情報については目を通してはないが、彼が俺にコンタクトを取りに来

たのはおとといの事。

「ジブン、元グループの奴に聞いたんすけどね。上の奴らが脅してたのは誰かに頼まれてやったことらしいんすよ」

「小遣い稼ぎのためにやってたわけじゃないのか？」

「まあ、もともとうちのグループは過激派でもなかったですし。でも、元リーダーのところに女が来たらしくて。依頼つーより、聞いた話だと脅されてる……ってほうが近いと思います」

「ちーくん、その女の姿は知ってるのか？」

「いや、すいません。その時はオレ用事があつて……容姿は一応聞いたんすけどパーカーしてた上にカラコンつけてたらしく、はつきり分かんのは背が女にしては高かつたつてことぐらいで……直に見ても分かつたかどうかどうか怪しいつすね」

「しかしなるほどな。どうやら繋がっちゃったみたいだぜちーちゃん」

先輩に幻想御手を渡した男とその女はつながつてると見て間違いないだろう。

ちーくんのグループに依頼をしたのは先輩に幻想御手を使わせるため。

ならばその行動のメリットは？

先輩が幻想御手を使う事で誰が得をするのか。誰が損をするのか。

「あー……俺。役に立ちましたか？」

「おう。かなりな」

俺がそういうと、ちーくんは何か思い悩むように顔を下げると絞り出すように声を出した。

「俺の友達、今病院で眠ってるんです。や……友達だけじゃなくてグループの何人かもなんですけど……治りますかねえ……」

「治るさ」

ああ。治る。俺の上位互換様がそれに関しては何とかしてくれるはずだ。

もうすぐ意識を失う先輩の事も、悔しいことに全部何とかな。

その点、俺はアイツの事を信用している。

「だから俺はもう一度変なことをしてこないように、事件に潜んだピエロを追ってみる。だからちーくんは残ってる仲間の面倒でも見てろよ」

先輩の妹に危害を加えた男たちは警備員によって隔離されている。

ちーくんの話を聞く限り、そいつらには軽いヤキを入れておくだけで済みそうだ。

「お願いしやす。頑張ってくださいいっす！」

ちーくんの声を聞きながら店を出る。

しかしこれで今後の方針ができた。

「あーあー、もすもすひねもす？」

『妙な電話のかけ方をするのはやめてください』

握っている電話から不機嫌そうな声が聞こえてきたのを確認して、通信相手が間違っていないことを確信する。

「めんごめんごー。で、オペ子さん。調べてほしいんだけど、幻想御手の受け渡しにアナログな受け渡しをした件は何個あるか調べてもらえる？」

『それならば調べるまでもなく暗記しています。全64件です』

「さつすが。じゃあもうちよつと絞るぜ？その受け渡しに小柄な女が関わった例は？」

『……………』

通話先の空間からカチコチ、とクリック音が連続して響く。

そして、十秒もしないうちに彼女は淡々ついた口調で情報を述べた。

『全三件です。一つは貴女の通う学校の生徒に。そして、スキルアウト集団に。最後の一つが……………』

「ん？どうしたオペ子さん」

『……………いえ。最後の一件に関してです。心して聞いてください』

珍しく迷いの見える口調でそう述べたオペ子さんのことばに思わず目を見開いた。

や、ハハハ。これは乾いた笑いも出るってもんだぜ。

ピエロめ。わざと俺にこの情報を掴ませようとしやがったな。

「さんきゅーな。オペ子さん。料金はまた今度折半で」

ピツ、という電子音がイヤに耳に残ったような気がした。

すう、と息を吸って吐く。

それで気分をなんとか入れ替えようとしたけれど、なんだか思ったよりもうまくいかない。

気を抜くと震えそうになる指をパネルに走らせる。

「もしもし、七夕さん？今から俺んちに来れる？」

『え？どうしたの急に。今から？別にいいよ』

「いいか？急いで来いよ。マツハで。今世紀最大のスピードで」

『分かってるよう。もー』

少しむくれたような声に少しだけ笑みが漏れる。

笑みが漏れる。



「いえーす、透ちゃん！」

「よう。七夕さん」

元気な声を上げながら部屋に上がってきた七夕さんは、俺の住んでいる家を見て思わず息を漏らした。

「久しぶりに来たけれど、やっぱりすごくいい家だね。透ちやんの家は」
「あー、そうか。そういうえば七夕さんは学生寮に住んでるんだっけ」

俺の家は、いかにも高そうな高層ビルの一室を借りている。

無論、この建物すべてが俺の所有物と言うわけではなく、学園都市が俺に首輪をつけておくために与えたものだ。

だが、それだけに使い勝手はいい。

……まあ、何があってもいいようにすぐに引き払えるようにはしているのだが。

「そういうえば透ちやん。まだちやんとした服着てるんだね？」

「ん。そう言われればそうだな」

「それって……あの、先輩と付き合ってるから？」

「あー……………」

そういうば学校にはそういう風に広まっているのだった。

やべえ、その事については全く考えてなかったぜ。

まあ、俺がフラれたことにすれば……いや、こういうばあい俺がフツたことにすればいいのだろうか？

「透ちやん？」

突然悩み始めた俺が不思議に映ったのだろう。コテンと首をかしげながら俺の名前

を呼ぶ七夕さんに、我を取り戻す。

あぶねーあぶねー。つい考え込んでしまったぜ。

「や、実は俺が先輩に……先輩をフツたんだ。やっぱり合わなかったみたいでさ」

「そっか、ならよかった」

今まで見たことがない程の笑みを浮かべる七夕さん。

この子は人の不幸（先輩と彼女はほほほ無関係だが）をこれほどに喜べる人間だっただろうか

少し心配だ。心配っちゃうぞ、お兄さん。

「ふにや……。まあ、透ちやんがそのままできてくれたらうれしいんだけどね。最近の

透ちやんはなんか無理してそうだったし……」

「」

「そう？ずっと透ちやんを見てたんならだれでも気づきそうだけどなあ」

「それはともかく、またジャージで登校するけどなあ」

「えー……。せめてじゃあ男物の服着ればいいのに。……ふわ……。ごめんあくびばかり」

「いいよ、なんならソファで横になれば？」

「んー……。じゃあそうするね。あ、そうだ。透ちやん」

「うーん、別に何でもないや。えへへ。じゃあおやすみね」

「
」
●
オペ子さんに聞いた情報では、三件のうちの最後の一つは俺たちが通ってる学校の教師だった。

や、学校の教師というには少し語弊があるか。

その人物は教師として在籍しているにも関わらず記録には残っていないのだから。記録の浅い部分に彼が施した『授業』の内容が転がっていたそうさ。

個別授業。出席者は七夕さんのみ。

そしてその授業で彼は幻想御手を七夕さんに使ったのだという。

誘われている。

いくらオペ子さんが優秀だとしても、そんな記録が簡単に転がってるわけもない。つまり。先輩と七夕さんに幻想御手を与え。そしてそれを俺にわざと気づかせて得をする人物が犯人と言うわけだ。

そしてそれこそが犯人のすべての狙い。

俺を犯人に復讐させる。

俺に刺激を与えて変化を促したい人物。
そんなの一人しかいない。

「ふうん、彼女はようやく気付いたみたいですね。なんというか、遅すぎるというか」
彼の視点は研究所の壁を突き破って侵入してきた七節透を移す画面に注がれていた。
「さて、予想よりもかなり遅いスタートだったが。果たして僕は何の尾を踏んだのでしょうか。虎か竜か。一番嫌なのは猫とか犬とか。小動物が一番怖いんですよ……」
愛らしいくせに何をしてくるか分からないんで。と、そう呟きながら研究所に所属する研究員を外に逃がす手続きを終わらせた名村は背後に立つ人物に人の好きそうな笑顔を見せた。

「と言うわけで、あなたとの約束通りあなたを使いつぶす時が来てしまいました。残念です。あなたのその装備をもっといじりたかったんですけど。それからのことは僕には知りません。では行ってらっしゃい」

音を鳴らしながら部屋を出ていく影に背を向けながら計器の確認をすませようとす
る名村は、ふと手を止めた。

「さて、この実験でどこまで変化が起きるのか。……最悪誤差レベルですかねえ」

●
ソレを視界に入れたのは、窓を破って人の気配がほとんどしないことに気づいたとき。

あまりに静かな空間に唐突にガシャガシャと機械的な異音が割って入ってきたのだ。思わず紫電が漏れる。

緊張により体がこわばり、演算にわずかな乱れができてしまっていることに自分自身に呆れてしまう。

いよいよよかぶっていた虎の皮が剥がれ落ちかけているらしい。

そもそも、洗脳に近いことをして前世の人格を真似ようとしたのもそれならば今よりも強くなれると思っただからで。それをしたうえで壁に当たったのだから密(みつ)蟻(あり)さんに申し訳ない。……彼女はいまどうしてるのだろうか。

「邪魔だから」

腹立ち交じりに、電撃を影の横からぶつける。

どんな装甲であろうと貫くか熱で溶かしてしまう電撃の槍は、しかし影に当たると消え去った。

「っ……………」

こいつ吹けば飛ぶような木っ端じゃない!

後ろに下がりながら、影の首、胴、股間、と体の中心線に向けて別々の方向から一斉に電撃の塊をぶつけた。

しかし、それすらも影には全く効いていない……。

でも、電撃の塊をぶつけたからこそ見えたものもあつた。

まずは相手の容姿。まるで西洋鎧の様なつくりの金属が体に張り付いている。

というか鎧の作りが絶縁体とかじゃなくて、要は単純にアースね。

だけど、電撃は地面に流せても熱はどこに……。

シユオツ、とまるで空気が抜けるような音を立てながら鎧の後ろから煙が排出された。

いやいやまてまて。いくら学園都市の科学力がすごいと言ってもあの薄型の鎧の中に熱を逃がす排出機構など作る余地なんかないだろう。

よくて電気を地面に流せるように仕込むくらい。ならばアレは中に入っている人間の能力で無理やり体内の熱を逃がしているのか。

「そんなめちやくちやな……」

ようはこれも先生の作品の一つと言うわけだ。

つまり、内部の能力者に排熱機構と動力を任せ、それ以外を機械などで補った一つの

兵器……。

「……………」

「ちよつ……」

舌打ちしながら、常人以上のスピードで迫りくる西洋鎧もどきの攻撃を避ける。

電気信号を脳に介さず避けるなんて、朝飯前だけど。それに体力がついてくるかはまた別だ。

「つ……」

電撃を地面に放ち、彼我の間にわずかな壁を作り出す。

案の定、西洋鎧もどきはわずかにたたらを踏んで、攻撃の手を僅かに緩めた。

その隙に、山のように積み重なる機器類の数々に、電気を通電させて持ち上げる。

そしてそのまま敵の頭上に移動させた金属の塊を鎧の上へと落とした。

鎧、中にいる人。すべてを足した重さよりもさらに重い鉄塊は鎧に迫り、しかし躲された。

(よし、躲した！)

間髪入れずに、鎧との距離を一定に保ちつつ機器類を投げ飛ばす。

避けるという事は、当たるとマズイってことだ。

防御面では大丈夫だったとしても鎧がへこんだりするとアース機構が崩れてしまう

からかもしれない。

もしくは全く別の理由かもしれないけれど……。

(でも、効くって分かっただけで十分！)

戦いは研究所の奥に向かって進んでいく。

このまま、先生を探しつつあいつに攻撃を与え続ければ。

攻撃のレンジ的に優位をとってる私が勝つはず。

勝機を見出し、何発目かの攻撃を鎧に見舞おうとしたところで反射的に私は顔をそらした。

センサーに引っかかった物体をとっさに避けたのだ、と偶然の回避を知覚しながらこめかみのやや下をかすめて行ったものが何なのかを鎧の動きから察する。

「瓦礫をなげてるの!？」

なんて原始的……だけど攻撃自体の脅威は高い。

前方に電気の壁を張ったところではたしてあれは私との手前で止まるのだろうか。

もしも確実に止めようと思ったら鎧の姿が見えなくなるほどの離れた距離に密度の高い壁を張らなければならない。

そうなれば、鎧に接近戦に持ち込まれ待っているのはじり貧だ。

ならばこの状況で打てる最善手は今までと同じように、物理的に攻撃をしつつ隙があ

れば中身の排熱処理が追い付かないほどの頻度で電撃を放って、中身の人間を蒸発させること。

……だけどそれは中の人間も殺してしまう手段だ。

うっ、参った。『俺』だったらある程度の犠牲は見逃すことができたのかもしれないけど、私は人を殺すことに気後れを感じてしまう。

いや、それを置いておいても目の前の鎧を殺してしまう事は先生の思惑に乗ってしまうような気さえするのだ。

ほかにもあるだろうか？ 電撃バット（『俺』命名）で敵の攻撃を打つとか……。

ううん。無理無理無理。そんな芸当が許されるのはギャグマンガの中だけだつての！

考えろ考えろ。先生が俺を殺すことを目的にこいつを向かわせたわけではない可能性は高いんだ。

だったら何らかの攻略法がある……。

手を止めずに頭を動かせ。

アースを搭載しているという事は鎧自体には電気は通るといふ事だ。

という事は相手は私が電撃を相手に流してる間は地面から足を離すことができないという事だ。

その時はどうしても機動力に制限が出る。
だったら……。

肩にしょっているバットケースから特注用バットを取り出す。

そしてそのままバットに通電。内部のブースターを利用して電気をバットに溜めていく。

「飛んでいけっ!」

バットの許容委範囲を超え、電気を漏らすバットをそのまま直上に投げ飛ばす。

その電撃の槍は上階のいくつにも大きな大穴を開けて、施設を大きく揺らした。

これがゲーセンのコイン一つで同じことができる超電磁砲ってコスパ的にもやっぱ
り優秀だよなあ、と今後はゲーセンのコインを携帯することも視野に入れつつ体を次の
行動に移す。

右手を敵に、もう片方の腕を上階に向ける。

「さて、どっちが先に壊れるかしら?」

そんな風に嘯きながら、両方の腕から電撃を放射的に発射した。

「……………」

もくろみ通り。鎧は電撃の衝撃に耐えるべく僅かに体をこわばらせながら動きを
鈍らせる。

その隙に、左腕の電撃を手繰るように少しずつつ動かしていく。

「……まあ、そう簡単に作戦通りに動かさせてくるわけないよね！」

排気を上げながら彼我の距離を詰める敵を抑えるべく、さらに電撃の威力を上げて敵を押しとどめる。

「ぐうううう……！」

頭がみしみしと言うような錯覚に陥る。

私じゃこれ以上は限界だっていうのか……？

やっぱり俺じゃないと……。

すうつ、と血が体から抜けるような感覚が生じて、意識が外に向かって引つ張られていく。

「ふう……！」

息が口から洩れていく。

電撃も威力を落としていき、鎧は確実に距離を詰めてくる。

私では荷が重かった？

私じゃ先生から、先輩や七夕さんを守ることができない？

「ぎっけんなー！」

原作に逆らうことができないなら。せめて原作から離れた人ぐらいは守って見せな

いと、超電磁砲の下位互換でさえ名乗れなくなる。

可能な限り出力をあげ、頭上に放っていた網のように感覚的に広げた電流を下に向けて振り下ろした。

そして、頭上の床を崩壊させながら重い機器類が私たちに向かって降ってきた。

「おお。おお……いやこれは想像以上の結果ですね！今確かに彼女は樹形図（ツリー）の設計者（ダイアグラム）の限界を超えて、微細な電流操作を一時的にせよ可能にした！」
「それが死ぬ前の最後の言葉でいいの？セ・ン・セ・イ？」

「ああ、やはり無事だったんですね。それで彼女はもう死んでます？」

「彼女？……ああ、鎧の中の人。女性だったんだ。あの人なら無事みたいだった。足か手の一つはダメになってるかもしれないと思ったけど……まあ奇跡的ってやつみたいね」

「そうですか。……彼女はとある実験の被害者ですね。生きる気力がなくなった彼女を有効活用しようと僕が知り合いに譲ってもらったんです」

「……それは彼女を助けるためってこと？」

「なんでそんなことを考えることができたのか疑問ですね。単純な資源的観点からですよ。……そこそこ丈夫で安価な資源を求めた結果です」

「それでなんのつもり？」

「?。何がです？」

すつとぼけたようにそういう先生に、眉を吊り上げながら彼に追求する。

「何がじゃないわ。鎧の彼女以外にセキユリテイが何もなかった理由を聞いているの」

「別に何もありませんよ？ただ単純にあなたの研究を進めることができるのなら自分の命なんて安いものと思つた故にですわ……」

「あなた……まえから思つてたけどやっぱり気持ち悪いわ」

「ええ……」

少しだけ傷ついた表情を浮かべる先生をあきれながら見る。

人間的に破たんしてるくせにこういうのは傷つくのか。

「もともと、無関係の人を巻き込むのはやむにやまれぬ場合のみと決めていまして」

「どの口で言つてるんだか……」

「別にごまかしたりしてゐるわけではありませんよ？今回の事であなとも何かを掴んだりしたのでは？それは人間的な成長しかりです」

「……」

「どうです？あなたが良ければこれからもあなたの成長を促すことができる実験をして

あげ……」

「ふざけるな」

ほとんど反射的に体から電流が漏れた。

それは私に差し出していた先生の右腕の表面を焼き、彼の運動神経系を一時的にマヒさせる。

「確かに、大事なことにいくつも気づいたわ。ふてくされてるだけじゃダメだってこととかね。でも、あなたを野放しにしたらいっつ私の大切なものに手を出すか分からないもの。あなたみたいな爆弾を線も切らずに野放ししておくわけにはいかないわ」

「では殺すと?」

「そう。そのつもりだった。あなたがここまで人間的に破たんしてるとは思ってたから。このままあなたを殺せばきつと私は学園都市の深いところに足を突っ込む羽目になる。そうなれば先輩や七夕さんに会う事も出来なくなる」

そう。私は今の生活が気に入ってるんだ。

下位互換でいい。LEVEL5になることなんか求めていない。

「私の事ならば、そうね好きに研究するといいわ。でもその代り。いつでも私の手が届くように」

「体をいくつか削ってあげる」

「ん……」

「もう、起きてよう透ちやん」

「んにゃ、あ。七夕さん」

七夕さんの声で眠りから覚める。

どうやら授業中に眠ってしまっていたみたいだ。

目をこすっていると七夕さんが目をぬぐってくれる。

結局。あのあと私は皮を完全に脱いでしまったらしく、『俺』が戻ってくることはなかった。

いや、かわらず前世の事は覚えてるけど。それを体験したのかと言われると少し首をかしげずにはいられない。

つまり。私は前世の知識があるただの人間だったのである。

パンパカパーン。

なんて。だからこそあそこまでこじらせたんだと思うけど。

結局、あの皮をかぶっていた時期も一年も無かったわけだし。思春期の中学生にはよくあることを経験しただけなのかもしれない。

まあ、広い目で見たらただけど。爬虫類並みの。

「じゃあ、一緒に帰る？先輩ももうすぐ退院するんでしょ？しようがないから私も一緒について行ってあげる！」

「う、うん。別についてきてくれなくてもいいんだけどなあ」

「んー？」

「あ、はい。何でもないですたい……」

そう。先輩ももうすぐ退院する。

目の前の七夕さんが無事であるからこそ確認できるように、幻想御手事件はちゃんと我らが上位互換様のおかげで解決の目を見た。

え？LEVEL5にならなくてもいいって言ってた割に少し口が悪くないかって？

まあ、少し考え方が変わっても苦手な人が変わることはないのと同じ事である。

本質的に私は彼女が嫌いだ。彼女が私の事をどう思うかは勝手だけど。

「あつ……」

「ん？げえつ……」

下駄ばきからかわいさのかけらもない（新しいのを買おうか悩んでいる）スニーカーを引っ張り出し、校門の近くまで来たところここでここ数日で嫌でも見覚えのある姿になった彼女を確認することができた。

彼女は、いつものように茶髪のウルフカットを携えながら色のない表情でこちらに
よつてきて、私に体を摺り寄せてきた。

「ちよつと待てえい！」

「……………」

ペリペリという擬音を発してそうなほどの勢いで七夕さんが、彼女。仙台（せんだい）
耀（よう）ちゃんを私から引きはがす。

乱暴な真似をされても、相変わらず彼女はめんどくさそうな顔で七夕さんの言葉をこ
ちらを真つすぐ見ながら聞き流している。

そう。彼女はあの鎧の中の人である。

正直、めちやくちや美人でびっくりした。

こういう女の子が『俺』とか使えば映えるんだらうなあと思ったのは別の話。

彼女はめつたにしゃべらないので、あんなに乱暴なやり取りをした私に引つ付く理由
はとうの私にも分からない。

ちなみに、彼女は高校生。傍目から見ても私から見ても中学生に抱き着く変態さん
だ。

さて、こうなってしまったらあととはめんどくさいことになるのは目に見えているの
で、帰る約束をしていた七夕さんには悪いがこつそり一人で帰ることにしよう。

相変わらず耀さんはこちらを見ているが何の反応もないのでこのままトンスラさせてもらおう。

さて、校門から離れて歩いているけれども。あれから二週間ほどたっている。うだるような暑さはさらに勢いを増して私ののを効果的に攻撃してくる。

まあ、つまりはのどが渴いたのである。

さてさて、比較的美味しそうな飲み物がある自販機はどこだったつけーと右を見て左を見て。

「ああ、不幸だああ……」

干からびかけたツンツン頭の少年が恨み言を唱えているのを目にした。

周りに自販機はない。今、私ののどを潤してくれる存在を求めるとは自販機の前立っている彼をどけるしかないのだ。

「あー、えつとお困りですかね？」

「うん……う？えつと……まあそうなんだけど」

汗を額に浮かべた少年を何とか下がらせながら、ばれないように排出機にむかって弱い電気を流す。

「はい、どうぞで」

「おお！俺の生活費！いやあもう会えないと思つてた！」

喜び勇んでいる男を後目に自販機に飲み物二つ分のお金を入れて、十本の指で同時に横に並んだボタンを同時押しする。

出てきたのは水とドリアンソーダ。普通とはずれが一つずつ。

「あ、これ要ります？私には飲めないんで」

「え、いいの……つて、このゲテモノ飲料水を飲めというのでせうか？」

「でも、どうせそのお金を入れたらさつきと同じことになると思うんですけど」

まあ、確かに。とか、小さい子におごつてもらおう男子高校生つて……とか呟きつつも差し出した飲料水を受け取る男を後目に先に水をのどに流し込む。

そんな私をみてあきらめたように顔を弛緩した彼はゲテモノ飲料水を口に含み、そして吐き出した。

「ぶえええ！まずいとかくさいとかじゃなくてエグイ！」

なんでこんなものおいてんだこの自販機！と叫んでいる男であるが、夏にもかかわらず激辛おでん缶をそろえている自販機もあるので、最悪の中でもたぶんそれが一番ましな奴なのだ。

「そういうえば、もしかしてどこかで会つたことあります？なんかさつきは俺の事を知つてそうな口ぶりだつたから……」

「やだ、上条さんだったらあんなに情熱的なことを私にしたのに」

そんな言葉をやや真剣気味に放ったもんだから男はさっと、顔を青くしたけれど。

すぐに元の血色のいい顔を取り戻し、左手で私の頭の上に手を乗せて。いやいや、と首を振った。

「いやいや、流石に小学生に手をだす上条さんじゃあないだろうし、そもそも俺はもっと大人なお姉さんが好きだからね……」

子供のままごとにつき合ってるお兄さん風に言ってるけど、私小学生じゃないし。

意趣返しに静電気くらいの威力の電気をぱちり、と手に食らわせる。

いて、と左手をどけた男は私のほうを見て固まった。

おかしい。彼が固まるような事をしただろうか。

「OK、ステイステイ。分かったからそのパリパリしてるやつを収めよう?」

「私中学生だし……」

「分かったから!その涙も抑えて!ここで泣かれたら完全に社会的な死が上条さんに襲い掛かるんですが!」

ギャアアアアア、と表情を次々と変える上条と名乗る男を見て多少留飲が下がり、体の表面に出ているらしい電撃を消す。

「あれ、何?またビリビリした中学生?この学園都市に電撃系能力者って多かったっけ

「？」

「前世で電撃系能力者の中学生相手にやらしいことでもしたんじゃないんですかー？」
「そういうこと言うのやめてもらえませんか!？」

はあ、と一度溜息をついた上条さんは私の顔をまじまじと見つめてきた。

「な、なんですか？ やっぱり上条さんは自分より小柄な子が……」

「いや、やっぱり中学生くらいの子でいきなり能力を使ってくるほうがおかしいんだなって再認識してた」

「比較対象がなんだかおかしい気がします」

LEVEL5はみんな頭のネジがいい方向にも悪い方向にも一つか二つ常人とは違う物で構成されてるので何かと比べる事には向いていないと思う。

「で、えつと。真面目にあったことある？」

……。やっぱり、分かっていたこととはいえ、真正面からこう言われるとなかなかあるものがある。

そういう心の中で思っていることを全部隠しながら、彼の質問に答えることにした。
といつても。なんというか滑稽だけど。

「久しぶりだから分からなかったんですか？」

「え？」

「数年前に上条さんの近くに住んでた七節透です」

「え？あ、あー！言われてみれば？」

「フフフフ。まあ忘れてるんじゃないかとは思ってましたけどー」

うん。まあそういう事なのである。

学園都市に来る前から私と上条さんは会ったことがあって。

ちゃんと前世の事を認識してからは、あれ？テンプレ転生？なんてことを思ったこともあったほどだ。

まあ、転生ではなかったわけだけど。

「ぎぎぎ、ごめん。全然気づいてなかった」

そういう風に本当に申し訳なさそうに少し頭を下げる彼には、なんだか言葉以上の意味が込められているような気がして、彼を許さざるを得なかった。

「ええ、まあいいですよ……って。結構長話をしてしまいましたね」

「あ、本当だ。割と長い間つき合わせたみたいで、ごめんな」

「いえいえ、久しぶりにちゃんと話せたような気がするので。ではまた今度」

「おう。今度は俺がおこつてやるよ」

「……期待せずに待ってますね」

「そこは素直にうなずいてくれたほうが嬉しい上条さんなのであった……」

うだるような夏。

そういえば、彼が私の日常からいなくなったのもこんな日だったような気がする。

あの頃の事は、うん。なんというかこれから黒歴史を積み上げていくであろう私でも
恥ずかしいくらいのものでむず痒いのだけれども。

うん。私が彼を好きになったきつかけはきつとその時だ。

これから積み重なる彼の困難と。

彼の困難を一パーセントでもいいから肩代わりできればいい、とどうしようもない現
実を壊すことをあまりにも遅いながらも決めた女の子は。

きっとこれからも賑やかないつもの日々の中で何度も交わるのでしょうか。

その困難に彼女はどうか立ち向かっていくのか。

そんな宿題を残しつつも物語はいったんここで幕を閉じます。

おしまい。